

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 27 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520957

研究課題名(和文)近代日本の「軍都」に関する社会地理学的研究

研究課題名(英文)Social geographical research on military base and the urban society in modern Japan

研究代表者

遠城 明雄 (ONJO, AKIO)

九州大学・人文科学研究科(研究院)・教授

研究者番号：00243866

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円、(間接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、空間の社会的生産という地理学的視点から、近代日本の地方都市を主な対象にして、軍隊の存在が土地利用、インフラストラクチャーの形成、社会、経済、権力構造、地域意識などに与えた影響を明らかにし、近現代日本の都市化と地域編成の特質を考察することを目的としている。

その結果、食料供給(残飯)や日雇労働の需要など、軍隊と都市下層社会の間にある複数の回路の存在が明らかとなったほか、軍隊の移動がもたらした流行病への対処、帰還部隊を受け入れる際の地域社会の対応、軍施設の誘致に関わる言説など、軍の存在と活動が、近代日本の都市形の特質を考察する上で重要な論点であることを、より具体的に明らかにできた。

研究成果の概要(英文)：This research aims to clarify the impacts of military bases and activities on the urbanization(infrstructure, social and economic structure, local conscoiusness) in modern Japanese second ary cities.

We analyzed the interrelations between military base and urban underclass through the aliment(leftover rice) and daily labor, sanitary problems (local organisation for epidemic chorela), situation on the invitation of military facilities by city gouvernment, welcome event of victorious troops by local communities and so on. So we found out that military base and their daily activities caused positive and negative effect s on the urbanization and spatial-social-economic structures in modern Japanese cities.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：人文地理学

キーワード：軍都 建造環境 場所の政治 空間の生産

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 1980年代以降、日本近代史や都市地理学などの分野において、都市史研究への関心が高まり、研究の蓄積が進んでいる。そのなかで、軍隊が、都市空間の形成過程、都市社会の構成、住民の地域意識、都市経済の展開などにいかなる影響を及ぼしているのかという問題に関心が向けられるようになったが、その実証的研究はまだ不十分な段階にとどまっていた。

(2) 代表者はこれまでの科研費に基づく研究で、地方都市の都市化の諸相を解明してきたが、その過程で軍隊の存在が地方都市の都市基盤整備や地域住民の意識・紐帯などに与えた影響を研究する必要性を認識した。

### 2. 研究の目的

(1) 「空間の社会的生産」という社会地理学視点から、近代日本の六大都市と地方都市を対象にして、軍隊の存在が都市のインフラストラクチャー形成、権力構造、社会組織、経済構造、地域意識に与えた影響を明らかにし、近現代日本の都市化および地域編成の特質を考察する。

(2) 特に1890年代から1930年代の地方都市における都市の空間構造、地域組織と住民の意識、社会・経済構造、都市問題に対する軍隊というエージェンシーの役割をできるだけ具体的な事例を通して検討し、軍隊の存在が都市形成に与えた正と負の側面を明らかにする。

(3) 具体的な実証的研究を通して、空間の社会的生産論の可能性と問題点を明らかにし、空間論的転回以降の人文・社会科学の理論的研究の精緻化を図る。

### 3. 研究の方法

(1) 基礎資料として、図書館や文書館などにおいて、各地で発刊されていた新聞記事の検索とコピーを行う。また議会議事録やその他の行政資料、関連文書を収集する。以上の基礎資料に基づき、「軍都」および軍隊の都市形成に及ぼす影響を考察する。

(2) 全国レベルの資料や統計を活用して、主なフィールドとした都市の全国的な位置づけを行う。

(3) アングロサクソン圏とフランス語圏を中心とした都市社会地理学研究の理論的成果について、その批判的再検討を行い、経験的研究へのフィードバックの可能性を検討する。

### 4. 研究成果

(1) 軍隊と都市社会・経済の関係について以下の知見が得られた。

明治45年の春から夏にかけて起こった米価高騰問題（「生活難」問題）を分析した結果、この時期まで六大都市と地方都市の両方で軍隊から払い下げられる残飯が、「貧民層」の貴重な食料源になっており、一部は豚などの飼料としても利用されていたことが明らかとなった。この残飯の供給量は軍隊の動向（出征や新兵入隊など）によって大きく変化する性質のものであり、それが都市下層社会の生存に直結する問題にもなっていたことが明らかとなった。

また都市下層社会では、「唐米」などと総称されていた外国米よりも、残飯を好んで食べる傾向があったことも明らかとなった。こうした嗜好は、結果として「下からのナショナリズム」を支える感覚にもつながったと考えられる。この点は雑誌論文で論じた。

軍にかかわる日雇い労働が、都市下層社会にとってひとつの重要な雇用先となっていたことが明らかとなった。仙台市の場合、師団の所在地の周辺に「貧民街」が形成されており、その理由は日雇雇用と残飯払い下げにあったと考えられる。軍隊に経済的に依存する市の体質について、それを如何に改善するかが市政の大きな問題として認識されていた。この点については、雑誌論文で論じた。

軍隊と御用商人および下宿屋などの関係について、断片的であるが、軍の動向が都市経済に及ぼす影響が明らかとなった。特に基盤産業に乏しい軍都（仙台市など）において、軍人とその家族が落とすお金が都市経済に与える影響が大きく、都市が軍に寄生する割合が高くなること、また工場など兵器製造所が立地する場合を除いて、軍の存在は地域産業の発展につながりにくい側面があること、などが明らかとなった。

軍隊誘致の動きについて、いくつかの都市（福岡市など）について、その基礎的情報を収集した。福岡市の場合、築港事業をめぐって国港請願の動きが明治中後期から活発化するが、そのなかで大陸や朝鮮半島との交易拠点としてのみならず、軍事拠点としての優位性を強調する議論が次第に強まっていく傾向がある点を確認できた。この点は雑誌論文で若干紹介した。

(2) 軍と地域社会の関係について以下の知見が得られた。

仙台市を事例に、日清戦争後の軍隊の移動もたらした1892年のコレラ流行に対して、行政や住民がどのような対応を取ったかについて検討を行った。その結果、多くの寺院が臨時病院として活用されたこと、この流行を契機に各区に衛生組合が結成されたこと、その資金は住民からの寄付に依っていた

ことなどが明らかとなった。この出来事は、それ以降の仙台市における地域住民組織の動向を考える上でひとつの転換を示しているように思われる。ただし、その後衛生組合は活動しない状態が続いており、地域住民から批判の声が上がっている。その理由についてはさらなる検討が必要である。

明治期に帰還部隊を出迎える際に、仙台市では、各町が競ってさまざまな催し物を行い、これをきっかけに町内組織の活性化や再編が生じていることがわかった。凱旋という非日常的体験が町内という日常生活に一定の刺激を与えていたと推測される。

「廃兵」の存在について、若干の新聞記事から、地域社会で差別されていた状況などが確認できたが、この点についてさらなる検討が必要である。

軍隊解散後の土地利用の変化について、福岡市福岡城を事例に考察を行った。これは本科研の主要な研究主題ではないが、第二次世界大戦後に旧軍用地がいかなる過程を経て再利用されるようになったかは、軍隊の都市に与える影響を遡って考察する上でも重要な問題であるため、調査を実施した。その結果、戦後の混乱のなかで、国有地としての利用を希望する国と公園としての利用を希望する県と市、さらに進駐軍などの思惑が複雑に関係しながら、土地利用が決定されてきた過程が明らかとなった。この視点は、現在の福岡市の都市構造やその中心性を考える上でも重要なものであると考えられる。この成果は図書 で発表した。

(3) アングロサクソン圏とフランス語圏における都市社会地理学の研究動向について検討を行い、以下の知見を得ることができた。

アングロサクソン圏の都市研究に関しては、近年「アッサンプラージュ」概念を都市空間や都市ネットワーク研究に応用する動きが活発化していることが明らかとなった。「物質性」概念に着目しつつ、社会概念の拡張を図るこの立場は、これまで積み重ねられてきた都市インフラ研究との関連性で興味深い視点を提起していると考えられる。ただし権力概念の不在といった批判も上がっており、今後さらなる検討が必要である。この研究動向については、図書 のほか、『ネーチャー・アンド・ソサエティ 3 身体と生存の文化生態』(2014年5月発刊)所収の論文でその概要を発表している。

フランス語圏の都市研究において、「身体と都市」をめぐる論点に対して関心が高まっていることが明らかとなった。食料、ジェンダー、精神分析など多様なアプローチの可能性が指摘されており、前回の科研費で明ら

かとなったアングロサクソン圏の動向と比較しながら、その可能性と問題点をさらに検討する必要がある。雑誌論文 でその概要をまとめた。

ドイツ語圏の都市研究について、近年英語圏の批判地理学の議論に対する関心が高まっており、その批判的受容が進んでいることが明らかとなった。特に資本流通の諸矛盾と都市形成の変動を結び付けて理解する D. ハーヴェイの議論の今日的意味(サブプライム問題)への関心とそのひとつに挙げられる。この視点は近代日本の都市化(特に 1920 年代)を理解する上でも有効であると考えられ、図書 、 の一部でそれを活用した考察を行った。なお関連する独語論文の翻訳を『空間・社会・地理思想』16号に発表した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3 件)

ONJO Akio, Eating Rice and Feeding City: 'Body Politics' in Modern Japan, *Languages, Materiality, and the Construction of Geographical Modernities*, pp.29-40, 2014, SHIMAZU T., ed., Wakayama University

遠城明雄、明治期の地方都市における選挙と地域社会 福岡市の地方政治状況に関する覚書、史淵、査読無、150 輯、2013、pp.117-158

遠城明雄、地方都市の政治状況に関するノート 1889 年～1912 年の仙台市、史淵、査読無、148 輯、2011、pp.69 - 100

[学会発表](計 4 件)

ONJO Akio, Eating Rice Body Politics in Modern Japanese City, IGU 2013 Kyoto Regional Conference, 2013.8.6, 京都国際会館

遠城明雄、地域文化としての選挙、日本地理学会、2013 年 3 月 30 日、立正大学

遠城明雄、福岡城址からみた戦後日本の中央と地方 『新修福岡市史』の紹介をかねて、福岡地理学会、2012 年 1 月 22 日、福岡大学セミナーハウス

ONJO Akio, Sanitary Surveillance and the Control of Urban Space in Modern Japan, 1890-1910. 6<sup>th</sup> International Conference of Critical Geography, 2011.8.17, Goeth University, Germany

〔図書〕(計 5 件)

藤井正・神谷浩夫編、遠城明雄ほか、ミネルヴァ書房、2014、213

人文地理学会編、遠城明雄ほか、丸善出版、人文地理学事典、2013、761

福岡市史編集委員会編、遠城明雄ほか、福岡市、新修福岡市史特別編 福岡城、2013、335

岡崎敦・岡野潔編、遠城明雄ほか、九州大学出版会、テキストの誘惑 フィロロジの射程、2012、227

野澤秀樹ほか編、遠城明雄ほか、朝倉書店、日本の地誌 10 九州・沖縄、2012、672

〔その他〕

ホームページ等

<http://www2.lit.kyushu-u.ac.jp/~geograph/>

6 . 研究組織

(1)研究代表者

遠城 明雄 (ONJO AKIO)

九州大学・大学院人文科学研究院・教授

研究者番号：00243866